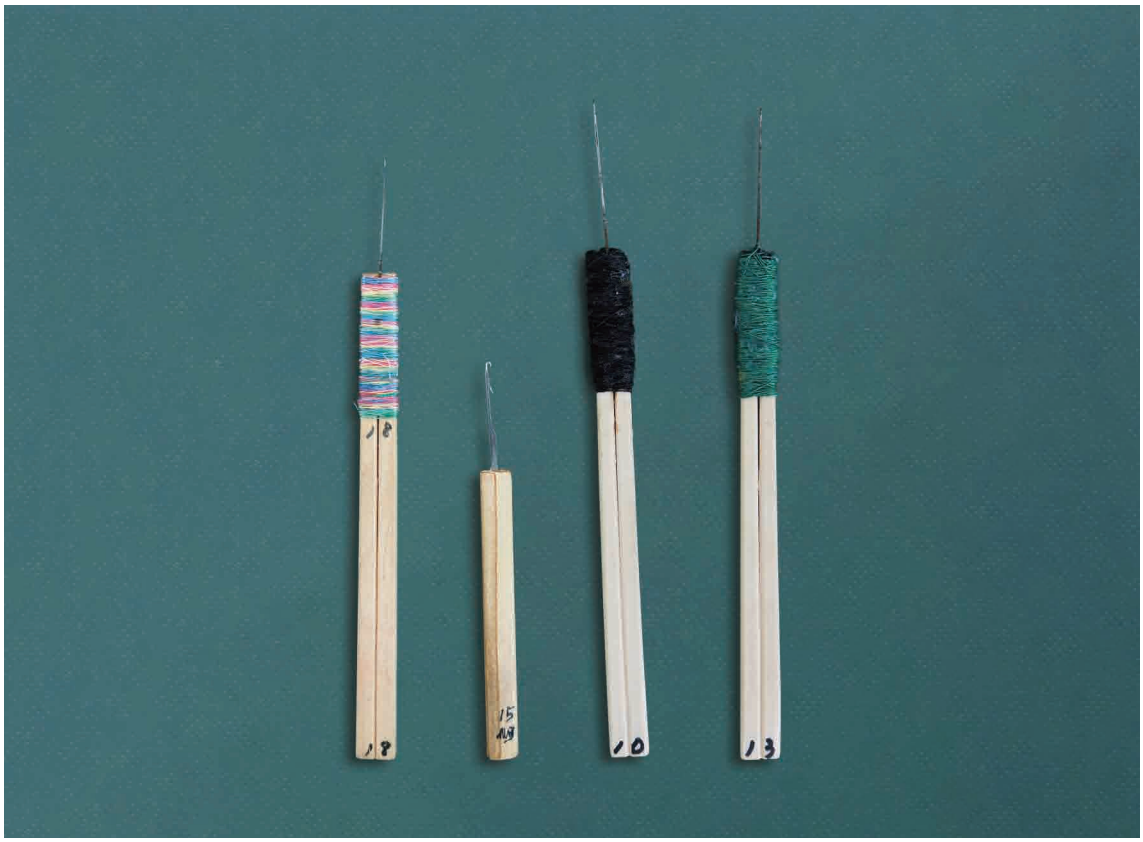
サイコロ

ISHIKAWA MERIYASU MAGAZINE

Special Feature

“ 人と機械と小道具たち ”



Column
私と石川メリヤス

News
新商品「カカト保湿カバー」を今秋発売

no. 08

1.

2.

3.

4.

5.

6.

タッピ、握りバサミ、ドライバー…

人と機械を支える裏方たち

商談の場で手袋や靴下のサンプルをお見せするとき、糸が1本ほつれて飛び出してしまっていることがあります。ニット製品は一筆書きのように糸がつながっているので、下手に切ったりすると伝線や穴あきの原因になりかねません。タッピを使って製品の内側にその糸を引き込むのが常道です。すると、商談の相手から「ニット屋さんらしいですね」と言っていただけたりします。

ニット工場で働く私たちにとってタッピはボールペンのように普通に使っている道具です。だけど、外から見ると興味深く珍しいものなのかもしれません。今回は、こうした道具を切り口にして石川メリヤスの生産現場をご案内します。

編立の現場では150台の横編み機があり、その大半が常に稼働しています。石川メリヤスは多品種少ロット生産に対応しているため、1日に10台程度は製品の切り替えがあります。また、機械内部の編み針が折れたり曲がったりすることも日常茶飯事です。

この機械を操作する社員はマイナスドライバーが必携の道具。度目（ども く）（編み目の密度のこと）を詰めたり緩めたり、針を支えている金具を外したり取り付けたり。糸を編み針に送り込む天バネの調整には六角レンチが必要です。

糸を補充したり製品を検品しながら揃えるのが担当の社員は握りハサミ（糸切りハサミ）を必ず持っています。編み機から出てくる製品は、製品同士や指と指が糸でつながっていることもあるからです。根元で切ってしまうと伝線のもとになりやすいので、つながっている糸の真ん中を切っています。

編み立てた製品の縫製や仕上げの工程は近隣の内職さんにお願いしています。届けて回収する「外回り班」が常にはめているのは滑り止め付きの手袋。製品をまとめていれたビニール袋はすべりやすいからです。なお、外回り班の社員は内職さんと同じ作業を自分たちでも行います。ミシンを使うことが多いので、すばやく糸を切れる握りハサミはこの班にも欠かせません。

冒頭で紹介したタッピは全社員が持っている小道具です。市販もされていますが、機械用の編み針をストックしている石川メリヤスでは社員が割箸などに針を挟んで各自で作っています。

このタッピを最も使うのは、内職さんから回収した製品を最終的に検品して

表紙. タッピ

ニット製品から飛び出した糸を内側にしまう道具。市販もされているが、編み機用の針があるニット工場では自作できる。番号はゲージ数を示し、数が多くなるほど針が細くなる。糸が太い製品には太い針のタッピを使うなど、用途に応じて使い分けている。

1. 2. 3. 道具置き場とその使用例

工場の一角にある道具置き場には、編み機の調整や修理に必要など道具が揃っている。六角レンチやスパナ、ペンチなどだ。最もよく使うのはマイナスドライバーで、ポケットに入れて持ち歩いている社員が多い。

4. 握りハサミ

タッピと並ぶ石川メリヤス社員の必携道具。コンパクトで先端が鋭利なので、製品の他の部分には触れずに糸を切ることができる。

5. 滑り止め付き手袋

外回り班が常にはめている滑り止め付き手袋はもちろん石川メリヤス製。規格外などで出荷できなかった二等品を有効活用している。

6. タッピを使っているところ

タッピの針を製品に刺し入れて出し、糸をうまく引っかけて製品の内側にしまう。この作業を素早く行うには習熟が必要だ。

包装し出荷する班の社員たちです。飛び出した糸の根元からタッピの先端を出し、カギに糸をひっかけ、バネの部分（ベラ針）を閉じて引き抜くと、糸はキレイに製品の内側に引き込まれます。簡単そうに見えますが、やってみると意外と難しい作業です。糸がうまく引っかからなかったり、ベラ針が生地をかんでしまったり。検品班のベテラン社員のようにタッピを高速で扱えるようになるためには熟練が必要です。

小道具から見えるニット工場の生産現場、いかがでしたでしょうか。石川メリヤスはすべての製品を自動編み機で作っています。しかし、製品の仕上げにも機械の調整にも人の手は欠かせません。その傍らでは、便利な小道具たちが常に控えて出番を待っています。

私と石川メリヤス

1962年設立（創業は1957年）の石川メリヤスは2022年に創業60周年を迎えました。長くお世話になってきた方にお話を伺うシリーズの第3回は南原康人さん。石川メリヤスのロングセラー商品である二重編み靴下「ラブヒール」開発のきっかけを与えてくれた問屋「タカハタ」の二代目社長です。

タカハタの創業者で初代社長の髙畑茂は私の父の従兄です。石川メリヤスさんとは長い付き合いで、私が中学生だった頃には先々代社長の石川進さんにカワハギ釣りに連れて行ってもらいました。

カカトのかさかさを取るために靴下にビニールシートを貼ることを思いついたのは弊社なのですが、四国の工場は面倒臭がって最後までやってくれず、髙畑が進さんに相談しました。そして生まれたヒット商品がラブヒールで、弊社でも「カカトクリニック」という商品名で販売しています。

タカハタは一次問屋なので、お客さんの９割以上が二次問屋です。そこから全国の洋品店などにカカトクリニックが流れていきます。小売店が強い近年は「自分のところだけ儲かればいい」という風潮ですが、消費者にも工場にも問屋にも少しずつ利がなければいけないと私は思っています。

例えば、タイトな納期を工場に強いれば不良品が増えてしまいます。そのコストはどこかがかぶらなければいけないのです。私は無理なことを言われても断るので、お客さんからはあまり好かれていません（笑）。

お客さん以上に仕入れ先を大事にする。この姿勢を貫いてきたからこそ、タカハタも石川メリヤスさんも生き残って来られたのではないでしょうか。

名古屋市北区にある株式会社タカハタにて。「カカトクリニック」は「黄色い箱の靴下」として消費者の支持を受け続けているそうです。

News

2023愛知環境賞「優秀賞」を 渦 japanと共同受賞しました

石川メリヤスではリサイクル（ダウンサイクル）や廃棄に回さざるを得ない残糸が毎年2トン弱生じています。そこで、同じ西尾市内にあるアパレルブランド渦 japanによる「不要になったものをアイディアと感性で価値ある面白い商品に変える」アップサイクルブランド「MOTTAiiNA（モッタイイナ）」に素材と生産技術を提供。残糸の現物を触りながらの話し合いを重ねることで、消費者の心に響く商品を生み出せています。「循環型社会の形成に大きく貢献するもの」と評価され、2023愛知環境賞の「優秀賞」の共同受賞に至りました。

AICHI Environmental Award 2023 愛知環境賞

2020年末に発売した「七変化スヌードポンチョ」（右下）は3か月間で300着を完売。今期も新たなMOTTAiiNA商品を企画中です。

二重編み靴下「ラブヒール」から生まれた 新商品「カカト保湿カバー」を今秋発売

空気をたっぷり含んで断熱効果のあるアウター。セラミックを練り込んだ特殊糸で遠赤外線の温熱効果を得られるインナー。かかと部分には保湿シートが縫い込まれています。それらを重ねて縫い合わせてあるのがラブヒールです。

発売から30年が経過しましたが、今でも「これがなくちゃ冬が越せない！」というファンの方に支えられて生産を続けています。寝るときも履きたいけれど、つま先が蒸れてしまう……というお客様の声にお応えすべく、つま先は出して足首とかかとだけを温めながら保湿できる「カカト保湿カバー」を新発売。就寝時だけでなく、ストッキングやタイツの上からサッと履けて、いつでも快適にかかとを保湿できます。

新商品「カカト保湿カバー」。お気軽にお問い合わせください。

Editorial Note

できる限りスピーディーに、かつ不良品を少なくしてモノを作る――。私たち工場が目指すべき姿です。そのためには、働く人たちが手を動かしながら頭も動かさなければなりません。会社の現状と課題を共有し続けることで、石川メリヤスも少しずつそんな人の集団になってきたと感じています。今号の特集では弊社の生産現場にある小道具たちを取り上げました。社員たちはこれらをまさに自分の手のように使って迅速かつ的確に作業しています。使い込まれた小道具は、「手を動かしながら頭を動かす」ことの象徴だと私は思っています。（大宮裕美）

Credit

編集・執筆・発行	石川メリヤス有限会社
Art direction & Design	相田貴子（Consulting Design Tokyo）
写真	石川メリヤス有限会社 ほか

2023年5月 発行

冊子名『サイコロ』とは

「メーカーの基本は何よりも品質」。
初代社長の想いが込められた創業以来の作業用手袋
「サイコロ印」のブランド名から名付けました。
本冊子では、この精神を守りつつ、
石川メリヤスの「いま」をお伝えします。

商品問い合わせ＆注文先

石川メリヤス有限会社

〒444-0515 愛知県西尾市吉良町富好新田紺屋堀 27-2
TEL 0563-32-0420 FAX 0563-32-3066
E-mail info@ishimeri.com URL https://ishimeri.com